

SHOW HEY シネマールーム

★★★

オリーブの樹は呼んでいる

2016年・スペイン映画

配給/アット エンタテインメント・99分

2017 (平成29) 年6月20日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：イシアル・ボジャイン

脚本：ポール・ラヴァーティ

出演：アンナ・カスティーリョ/ハ

ビエル・グティエレス/ベッ

ブ・アンブロス/マヌエル・

クカラ/ミゲル・アンヘル・

アラドレン

■ショートコメント■

◆オリーブは日本では小豆島が名産地で、私も小学生の時を含め、何度か見学したことがある。しかし世界的には、オリーブは人類が最初に栽培した植物と言われており、オリーブは「ノアの方舟」の話でも重要なシーンで登場する。また、オリーブの枝は国際連合の旗に描かれており、平和の象徴ともされている。さらに、オリーブは地中海沿岸原産で、スペインやイタリアなどの地中海地域で広く栽培されているようだ。なるほど、なるほど・・・。

◆ある日、脚本家のポール・ラヴァーティは、「樹齢2000年もの立派なオリーブの樹が売られている」、しかも、それが「環境を大切にしているという企業のアピールのために買われていったらしい」という新聞記事を目にして、それを妻で映画監督のイシアル・ボジャインに語ったところから、本作の企画が始まったらしい。

◆祖父ラモン（マヌエル・クカラ）が小さい頃から大切に育て、数年前に父のルイス（ミゲル・アンヘル・アラドレン）がある企業に売ってしまった、樹齢2000年のオリーブの樹は今、ドイツのデュッセルドルフにあるエネルギー会社のロビーに飾られていた。オリーブの樹が売られた後、ラモンは完全に心を閉ざし、家族とも口をきかなくなり、徘徊するようになったから、さあ大変。

そんなラモンの心の痛手を理解し、ラモンを見守ったのは20歳になった孫娘のアルマ（アンナ・カスティーリョ）だが、ラモンの心の痛手を癒すにはどうすればいいの？ そうだ。そのためにはあのオリーブの樹をエネルギー会社から買い戻すのが一番。そんなことはわかりきっているが、今更そんな・・・。

◆誰でもそう思うところだが、本作で2017年ゴヤ賞新人女優賞等を受賞した、映画初出演となるアンナ・カスティーリョ演じるアルマの行動力はすごい、というより、ある意

味猪突猛進でハチャメチャ。そんな世間知らずの娘アルマへの応援をやむを得ずさせられたのは、同僚のラファ（ペップ・アンブロス）とアルマの叔父・アーティチョーク（ハビエル・グティエレス）の2人だ。

その結果、本作中盤からクライマックスにかけては、バレンシアから遥か1659kmも離れたドイツのブリュッセルへのロードムービーとなるうえ、到着したエネルギー会社の前で、3人はあっと驚く行動を・・・。

◆中国映画『CEO（最高経営責任者）（首席執行官）』（02年）では、大学を卒業してハイアール社に入社したばかりの女性・楊陽（ヤン・ヤン）が、フランスでの販売責任者として超大胆な行動で大奮闘するエピソードが興味深かった（『シネマルーム17』335頁参照）。しかし、本作にみるアルマの行動力は、それ以上！

「ハンスト」（ハンガー・ストライキ）は弱者の抵抗手段、意思表示手段として昔からあるやり方だが、ハンストまでやらなくても、1人の女の子が抗議のために会社の前に座り込まれるだけで、その会社は大迷惑。しかも、そこにある日、地元の住民たちが大応援団として駆けつけてくることになる・・・。

◆本作がどこまで実話に基づく物語なのかは知らないが、そんな展開を見ていると、本作のラストはある程度想定できる。まさか、あの大会社のロゴにまで使われている樹齢2000年のオリーブの樹をそのまま持ち帰って植え替えるわけではないだろうが、その樹の分身を作ることくらいは容易なはず・・・？

本作にどんな結末が用意されているかはあなた自身の目で確かめてもらいたい、たまにはこんなワン・イシュー映画もいいものだ。もともと、本作を参考にして、本作を見習うような行動はしないほうが良いと私は思うのだが・・・。

2017（平成29）年6月23日記